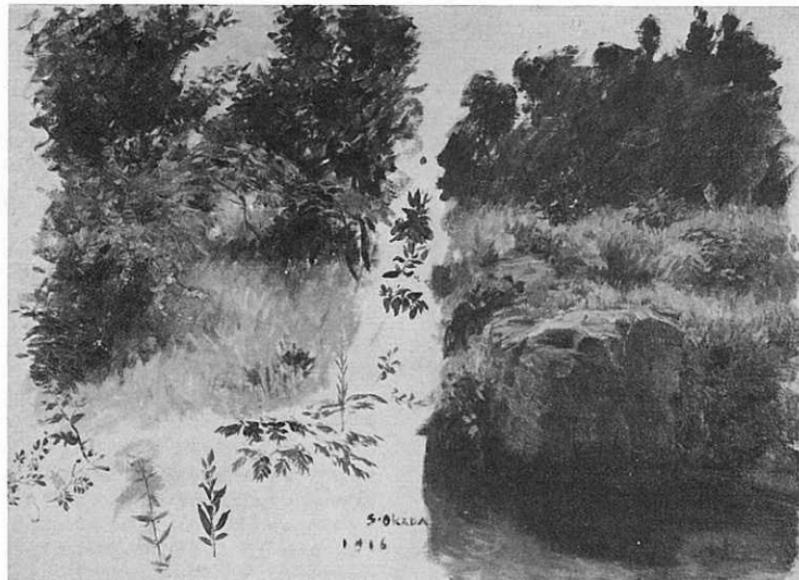


# 佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.65



大正5年（1916）

岡田三郎助 油彩・カンヴァス 53×72cm

第10回文展（大正5年）に岡田は「水浴の前」を出品する。岡田の裸婦像の傑作とされる作品であるが、この裸婦の背景となっている水辺と草花、森と遠くに透ける空を習作として描いたのが当資料である。ここでわかるように岡田は遠景と近景を別々のところから借用している。これらが縦につながることでひとつの風景が出来あがり、ひとつの舞台が作られる。まさにそれは背景であり、その場合、背景が独立してそれ自体完結した風景画とはなりえない。後年、岡田が描く森の中の裸婦が生彩を欠き、かえって室内の裸婦あるいは婦人像に見るべきものが多いのも、ひとつには、この岡田の舞台的背景志向によるものであろう。

目 次	○風景習作 岡田三郎助	表紙
	○資料紹介 一画室内	2~3P
	○明治前期の産業発達と佐賀人	4~5P
	○佐賀県考古学史	6~7P
	○行事のお知らせ・人事異動	8P

## 資料紹介

### 画室内

明治22年(1889)

黒田清輝作 油彩・キャンヴァス 40.5×32.0cm

この作品は、黒田のフランスにおける絵画修業の初期のものであり、「田舎家」「祈禱」「自画像(トルコ帽)」などがこの時期に描かれており、さらに東京国立文化財研究所蔵の「画室の一隅」(54.6×45.6cm写真1)が、当作品に相前後して制作されている。

「画室内」(写真2)は藤島武二旧蔵とされ、これまで展覧会等で紹介されることなく、一般には知られる機会がなかったが、今日、ふたたび私たちの目に触れることになり、黒田の画業における初期の数少ない貴重な1点として加えられることになるとともに、「画室の一隅」とあわせて批判の対象とされることで、黒田のこの時期における絵画上の关心がどこにあったのかが知られることになる。以下このことを考察したい。

明治22年2月28日付けの黒田が母に宛てた手紙に当作品にかかわることが述べられている。

〔前略〕こんどひつこしましたうちはゑをかくようまできてをるうちですからたいへんあかるくまことにしやわせです がつかうからかへつてからまたうちでゑをかきます てほんになるひとをたのんでかくとよしゆござりますけれどもなかなかこのほううおかねがかりますからたゞわたしのへやのすみつけのねだいのあるところのふうなどをかいてをります(後略)」

この書簡中、「ねだいのあるところのふう」を描いたのが当作品であり、また、さきの「画室の一隅」でもあった。この母宛の手紙により、黒田のこれらの作品が年紀の書き込みがみられないにもかかわらず、制作年代を決定することができたのであるが、この2つの面室を制作するにいたった事情については、彼自身が語ったことばが残されていないことから不明である。しかし、連作は別として、黒田が同じ内容をもった絵を2枚描くことがなかったことからみれば、私たちは、この2枚の絵についてことのほか興味をおぼえるのである。

ここで、この「画室内」について、「画室の一隅」との比較でその特徴をあげてみたい。

一、画面の中心的題材ともいえるストーブが描き加えられている。

一、画面右端の屏風の置かれている向きが変えられている。

一、屏風の位置変化のために寝台の奥の壁面に1枚の小さな絵(と思われる)が現れている。

一、画面の大きさが10号から6号へと縮小されている。

一、画面右上隅に「源清輝筆」の書き込みがある。

以上、主として画面構成からみた特徴的なことであるが、色彩はいずれの作品も赤褐色に白のハイライトを加

え、単一な印象を与える。「画室内」に見られる筆使いの細やかさ、密度の高さからみて、「画室の一隅」が「画室内」に先立って描かれ、それも途中で描くことが止められたと考えられる。

黒田がこの画室へ移ったのがこの年の1月末日である。2月1日付け父宛の葉書に「(前略)昨日轉居仕候 今度の處は巴里の極ク端にて都ト云よりモ田舎の方に御座候静にして妙ニ御座候 併し今迄の處よりモ餘程不便利に御座候 畫かき部屋一つ借り受け其中ニ住み込み申候(後略)」とあるが、ここがヴォージラール街のファヴォリト通26番 26 Passage des Favorites 271 Rue de Vaugirard のアトリエであった。ここには11月下旬まで居て、そのあとヴォージラールのセルヴァンテス街1番地1 Rue Cervantes に移り、ここで久米桂一郎と同居する。11月29日付けの父宛の手紙に「(前略)私事5、6日前轉居候て久米氏と同居仕候 今度の家ハ間數も3つ有之且つ清潔ニして心地よき事ニ御座候(後略)」とある。画室が描かれるのはこの間のことであるが、4月以降、気候が温暖になると、黒田はしばしば近郊へ写生旅行に出かけるので、このストーブのある画室を描いたのは2月から3月にかけてのことであったろう。

では、パリでもまだ寒が強いこの時期、なぜ、一方の絵はストーブが描かれ、他の一方には描かれてなかつたのか。しかもストーブが描かれていない方の絵が先に描かれていると仮定する以上、なおさらこのことについての違和感が残る。しかし「画室の一隅」はけっして完成された絵ではなく、出来あがる途中で画家の意志により筆を離れたと考えれば、そのあとふたたび、こんどは画面をはじめよりやや小さめにして描きはじめて、やがて「画室内」を完成させたとすれば、この2点の絵についてより説明がしやすく、また黒田の絵画上のねらいも明らかになってくる。

まず、この2点に共通する作画上の意図を考えてみたい。そのためには、「画室の一隅」において欠けているストーブを解決することであるが、このことは、「画室の一隅」において画面左やや下の位置に、ストーブが一度描かれようとしたとみることで説明がつく。机および椅子のちょうど実際はストーブににくくされる部分の処理の仕方と床面の描き方の不徹底さは、ふつう、習作にみるような軽いタッチの筆さばきとは違った、ぎこちなさを感じる。またストーブの煙突を消したあとと思われる黒っぽい絵具の線が壁面の左端に縦に走っている。これらのこととは、黒田がたしかに「画室の一隅」においてストーブを描こうとしたが、おそらく机とストーブ、あるいは屏風とストーブとの位置関係のまずさを直接の原因として、もうひとつ、もっと本質的には、絵における部屋全体の奥行きの問題がからみあって、この時期、黒田がもっと影響を受けていたレンブラント流の光と闇の問題が

ゆえに、黒田はあえて他のカンヴァスに描き直したと思われるのである。「画室内」では机の位置がやや上げられ、また屏風をいくぶん下げることで、画面左下部のストーブを十分に画面中に受け入れることができた。しかも湯気をあげるやかんをのせたストーブを描き込むことで、この作品は、はるかに人間味あるもの、生あるものとして息づくことになっている。そしてさらにこの生き生きとした感じを強めているのが、奥に拡がる間であった。

黒田はレンブラントにとって大切なこの間をつかみとろうとした。このために彼は、前述の母宛の手紙にも書いているとおり、「たいへんあかるい」画室に、あえて光をさえぎるように屏風を立てて、部屋の片隅に間をつくり出したと言える。つまり屏風はこの間を現出させるものであったわけであるが、「画室の一隅」においては、ただ単に光を遮断する役割でしかなかったものから、「画室内」においては、2曲に立てられた屏風の手前から奥の方へと遠近法が働かれていて、それは左側の壁と床面とがつくる交差線の斜線が進む先へつながり、そしてそこには間があるのだった。

黒田はこの絵に「源清輝筆」(写真3)とサインした。師のラファエル・コランから許可を得て、油絵を勉強はじめたから1年にして、黒田自らが自信をもてる絵を作成したということであろうか。「源清輝」のサインはこのあと明治23~24年作のサロン出品の代表作「マンドリンを持てる女」(東京国立博物館蔵)、「読書」(東京国立博物館蔵)にも同様にみられるところであり、この「画室内」にかけた彼の意気込みがうかがえる。

あかるい画室でのレンブラント研究から、やがて黒田は、彼本来の明るい色調へと変化してゆく。このことは、師コランの外光派流の指導もあったであろうが、戸外でのスケッチが気分を新たにしたのであろう。「画室内」が

描かれた同じ年の終りには、「画室にての久米氏像」(久米美術館蔵)が描かれ、そこでは明らかに外光派の描写を試みている。それは、久米との共同の新しい画室の大きくなされた窓からの逆光の中に描かれた作品で、すべてに光が当たり、もはやここでは屏風は光をさえぎることなく、片隅でそれ自体光を当てられる存在になっている。黒田はこれ以後、光に対して空ろな赤褐色系の色彩を取り、光に照らされた物の姿を描くことになる。

黒田は、油絵修業の初期において、オランダ、ベルギーをしばしば訪れ、レンブラントの絵の模写を行っている。しかしこのことは、彼がクラシックな氣質をもちあわせていたからというのではなく、その圧倒的な力をもった技術に彼が最大の関心をもっていたということのほうが正しいように思われる。というのも、彼はこの意味で「なだかいゑ」を写し、レンブラントを研究したのであり、彼の絵における本性はあくまでも日常性にあると考えられるからである。「画室内」の主題もレンブラント流の間を研究しながらも、私たちの印象は、ストーブの赤い火とやかんの湯気に刻みこまれるようだ。この作品については、黒田の油絵修業の初期段階のひとつ集大成として見ることも出来るわけであるが、すでに黒田の氣質にある「温和で細やかな情感」を私たちは見てとることができる。この作品にもっとも近い人物である久米が次のように述べているのも、この絵のあるいは本当の在りどころを示唆しているとも考えられるのである。

「〈画室内〉は君の巴里に於けるアトリエ兼居室といった部屋で、その当時の生活状態がよく偲ばれてそぞろ懐旧の情が湧いて来る」(「仏国修学時代の黒田君と其製作」方眼美術論所載)

(学芸員 松本誠一)



No. 1. 画室の一隅



No. 2. 画室内



No. 3. サイン

## 明治前期の産業発達と佐賀人-1- ——電信事業と石丸安世——

はじめに

明治維新を期に種々の重要な改革を実行した我が国において、ひとつの大きな改革は通信（コミュニケーション）であったろう。

新政府が行った改革は、やもすれば西洋文明の無条件的な導入であつたし、古きものはすべて無価値であり、旧弊一洗の名のもとに破壊された。しかし、近代的な通信の確立が新しい文明社会建設のために不可欠なものであるというのは、誰しもが心得するところであつたし、堅固な封建体制に守られ、260年もの間、世界から全く孤立していた日本が、わずか100年余で世界の先進国の仲間入りが出来たのも、まさにこの通信によるものであつたといつても過言ではないだろう。

佐賀藩出身の石丸安世は、明治4年に工部省に入り、初代電信頭として数々の事業を成し遂げていく。日本電信の生みの親といってよからう。薩長土肥の一につい数えられるように、佐賀は多くの優秀な人材を送り出している。特に、大隈や江藤の活躍は周知のことである。しかし、本稿ではあまり知ることのなかった産業に着目し、今回は、石丸安世を取り上げ、明治前期の産業発達における佐賀人はたした役割について述べようとするものである。

### 1. 草創期の電信事業

安政4年、佐賀藩主鍋島直正は、薩摩藩に内使を遣っている。これは佐賀藩精煉方に製作に成功した電信機を、薩摩藩主島津齊彬に献上するためであった。

『佐賀縣教育五拾年史』によると、直正公は、安政元年にオランダ国王が幕府に電信機（テルガラフ通信機）を献上したことを聞き、これは政治にも軍事にも重要なものと考え、精煉方に製造を命じたのである。そして安政4年、完成した電信機を携え、千住大之助、佐野栄寿左衛門（常民）、中村奇輔らが鹿児島に赴くのである。島津齊彬公の前、仔細を説明した中村奇輔は、発明は困難であったが、このように図面に現せば、あとは資本さえあれば、製造するのは容易であると豪語して在席者を驚

嘆させたという。

鍋島直正も、電信の有用性をいちはやく感じた一人であつたろう。

これより先、嘉永6年にペリー提督が幕府に電信機を献上している。おそらくこの時、日本人が初めて電信機なるものを見たであろう。そして慶応2年にはフリューリ・エラール（仏）が、また米国公使ケンピュルグの紹介でマックゴワンが、あいついで電信建設を勧説している。しかし幕府はこれを謝絶している。明治になって万国新聞などが電信建設の必要性を大いに論じたが、新政府もまだまだそこまで手を回せる状態ではなかった。

旧薩摩藩士寺島宗則は、藩主島津齊彬から電信の必要性について薰陶を受けた一人であったが、明治元年9月、横浜外國官判事兼神奈川県知事という政務上の必要からも、東京・横浜間に電信を建設すべきことを建議した。さらに同年9月広瀬主筋らが、又同月モンブラン（仏）らが、あいついで電信建設の申請がなされた。これによって政府もついに重い腰を上げ、同12月電信官設を朝議で決定し、そのいっさいを寺島に一任することとした。寺島は灯台明台役所のお雇い外国人ブライ頓を通じて、電信技師ギルベルトの雇い入れと、電信機械類購入を決め、明治2年、東京・横浜間に電信が開設し、同12月には公衆電報の取扱いも開始した。まさに電信の幕明けであった。

### 2. 佐賀藩出身の石丸安世

この稿の主人公石丸安世は、天保5年に佐賀城下に生まれた。家は龍造寺氏の支族にまでさかのぼるという。藩校弘道館に学び、蘭学寮新設にともない蘭学を修める。藩主鍋島直正は早い時期から西洋科学・技術に並々ならぬ関心を示していた。そして文化の初年、古賀穀堂が蘭学の必要性を強く説いたこともあって、この蘭学寮の設置となつたのである。この時、弘道館の内生寮の中から優秀な書生を選び、これを等分して大木民平（喬任）、実松一郎らは弘道館にとどめ、石丸虎五郎、小出千之助、江藤新平らは無息（二・三男）または手明鏡（下級武士）であるので蘭学寮に入れられたという。

安政3年には海軍伝習を命ぜられて長崎に赴く。長崎

年号	事蹟	年号	事蹟
天保5年（1834）	佐賀城下に生まれる。幼名虎五郎。	明治5年（1872）	従五位に叙せられる。
安政元年（1854）	蘭学寮に入る。	明治7年（1874）	工部省、有田の深川栄左衛門に電気碍子の試作を命じ、漸次、製造を始める。
安政3年（1856）	長崎海軍伝習生となる。（～安政6年）	明治10年（1877）	7月、大蔵省、造幣頭となる。
文久元年（1861）	秀島藤之助、中牟田倉之助と共に英学修業のため長崎に行く。この頃、フルベッキに就く。	明治14年（1881）	大蔵省、大書記官となり、1月に寮が局にかわり、造幣局長となる。
元治元年（1864）	馬渡八郎（俊邁）らと共にイギリスに渡る。	明治18年（1885）	大蔵省、書記局兼務を命ぜられる。
慶応3年（1867）	佐賀藩パリ万国博派遣団（代表佐野常民）を助けるため、フランスに渡る。	明治19年（1886）	主船局次長、海軍省など歴任する。
明治元年（1868）	歐州より帰国する。	明治21年（1888）	海軍省、小野浜造船所となる。
明治2年（1869）	佐賀藩海軍、軍事局、大弁務となる。	明治35年（1902）	1月、海軍大臣に任せられる。
明治3年（1870）	G、ワグネルを佐賀に招き、陶磁器の技術改良に当たる。		正五位に叙せられる。のち元老院議官となる。正4位に叙せられる。
明治4年（1871）	4月、工部省に入省する。8月、電信機掛が電信寮となり、初代電信頭となる。12月、		5月6日、死去。69才。特旨をもって従三位に叙せられる。

海軍伝習は、安政2年幕府がオランダからスームビング号（のち觀光丸と改称）の寄贈をうけ、これを練習船として海軍伝習を行なうものであった。佐賀藩はこれを重視し、のち藩独自の海軍まで組織することになるが、この時も精煉方の佐野や田中近江、儀右衛門父子をはじめ48名の多くのを送り込んだ。石丸はここで航海術をはじめ、造船術、砲術など多くのことを学ぶのである。

そして時代は蘭學から英学へと急速に変化していく。萬延元年の咸臨丸による遣米使節団に参加した小出千之助ら佐賀藩の一一行は、現今の世界文明は英語国民の中に勃興しつつあり、蘭語の如きはほとんど死語に近い状態にある。佐賀藩の外国语も蘭語から一転して英語に向かわなければならないことを痛感したということが一致したこと見であった。

文久元年、石丸虎五郎、小出千之助、中牟田倉之助、大隈八太郎、馬渡八郎らは英学修業を命ぜられ、長崎に行く。そして石丸は、のちに新政府の近代化政策に重要な役割をはたすフルベッキについて英学を学ぶのである。これが佐賀藩が長崎に設けた英学塾致遠館である。そしてその影響は、同じくフルベッキに学んだ大隈重信が懐述するごとく、西欧のみならず、西欧の哲学、宗教や数学まで教えを受けたことは、心の奥にあった西欧文明、特に宗教に対してもっていた偏見を打破することができ、その後の人生において大きな利益になったという言葉によく表されている。

その後、石丸は馬渡八郎と共に英國に留学を命ぜられ、日本を離れる。しかし表向きは内密にされ、密航のかたちであった。そして慶応3年バリ万国博の際、急遽、フランスに渡り、博覧会派遣団を手助けしている。

明治4年、開設したばかりの工部省に入り、しかも電信頭という要職につき、全国に電信線を架設するという大事業を遂行できたのも、この佐賀藩での種々の教育、また実践のたまものであったろう。

### 3. 石丸安世と佐賀

明治元年、歐州から帰國した石丸が明治4年工部省に入るまでの間、どのような活動をしたのか。伊万里山代郷で石炭採掘の事業に従事したとか、有田皿山の陶磁器の改良に力を尽くしたなどが伝えられるが詳細は分からぬ。

明治3年にはゴットフリード・ワグネルを招聘し、月給150両で佐賀藩に雇い入れている。ワグネルはのち政府に雇い入れられ、ウィーン万国博に顧問として活躍し、彼の意見による西欧での諸技術伝習、博物館建設の建議など、日本の近代化に大いに寄与する。ワグネルによる石炭窯、酸化コバルト、ゼーゲル三角錐などの紹介は有田窯業における近代的な技術改良の試みとなった。

そして明治4年4月、工部省に入っている。工部省は明治3年閏10月、工学・勵工・製作に民部省から移管した鉱山・製鉄・鉄道・燈台・電信の各掛を加えて新設された。我が国の近代化政策をになう花形役所であった。

石丸は明治4年8月、各掛が寮に改組されるにともない初代電信頭に就任した。その少し前の同年6月には懸

案であったデンマークの大北電信会社の長崎—上海間の海底線工事が完了し、すぐさま業務を開始し、日本も國際電信の仲間入りすることとなる。同8月東京—長崎間電信工事着手、同10月モールス電信機をイギリスから輸入、同10月電信寮内に修技教場を設置。明治5年4月京都—大阪間に電信線開通、同8月関門海峡に海底電線を敷設。そして明治6年2月念願の東京—長崎間の電信線が完成するといったように数多くの事業を成し遂げていく。

当時、国民の電信に対する認識もまだ低く、電信架線の妨害も激しい時で、石丸電信頭の苦労は如何ばかりであったろうか。そして、その影には有田の深川栄左衛門らによる国産電信碍子の開発があったのである。それまでの碍子はイギリス製の青色のもので、品質も粗悪でしかも価格も高かった。彼は有田のためにも、また電信の国产化のためにも碍子開発が急務と考えた。正式には明治5年に工部省電信寮から試作を命じている。全国に電信線を架設したいという彼の計画を支えたのは、まさにこの国産碍子開発にあったのである。

### おわりに

石丸安世の電信頭在職中のもう1つの重要な業績は、明治6年電信取扱いに関する定則、同文電報など電信に関する規則を集大成して、同6年8月「大日本政府電信取扱規則」そして翌7年7月「日本帝国電信条例」を布告したことである。

このような数々の業績を残して、同年7月電信頭から大蔵省の造幣頭に転じ、さらに海軍省主船局次長、小野浜造船所長などを歴任し、晩年は元老院議官をつとめた。そして明治35年5月に病気のため死去、享年69歳であった。

明治前期の電信事業はまさに時代の寵児であった。この電信を育てた石丸の功績は大きかった。そして本稿ではふれなかったが、同じ佐賀出身の石井忠亮は電信権頭として石丸を補佐し、電話開設に尽力し、日本電話の創始者といわれる。また田中精助は佐賀藩當時、田中父子らと共に諸機械の発明を行い、明治6年のウィーン万国博で電信機製造を学び、のち工部省で國産電信機開発に従事する。彼らも電信事業発達のうえで重要な人物であるが、ここでは名のみを挙げて詳述は後日にゆることにする。

(学芸員補 宇治 章)

### 〈参考文献〉

- 桜水遺稿  
人物通史 高橋善七  
お雇い外国人一通信 高橋善七  
お雇い外国人一政治・法制 梅溪昇  
佐賀縣教育五拾年史 佐賀縣教育会編纂  
佐賀藩海軍史 秀島成忠編  
中牟田倉之助伝 中村孝也  
佐賀県石炭史 井手以誠  
ワグネル来航百周年に當て 橋本謙一  
他



① 木下之治は大正6年5月、現在の鹿島市大字納富分に生まれる。昭和15年3月に佐賀師範学校専攻科を卒業すると同時に、能古見尋常高等小学校の訓導として教職に奉じる。戦後、昭和22年4月から鹿島中学校教諭として奉職をするが、昭和27年10月から佐賀県教育庁社会教育課文化係主事として原始・古代の研究と文化財保護行政に専念するようになる。その間、支石墓研究の松尾積作が昭和35年3月に没すると、佐賀県内における文化財保護行政の中心となり、日常の文化財保護行政はいうまでもなく、東京や関西の各大学の学術調査にも協力をするという人で財政的に困窮した状況の中「無い袖をふった研究者」でもあった。

とくに木下は、佐賀県という古代の歴史研究の環境の中で独自な発展をとげた古墳時代に注目をし、鳥栖市東十郎古墳群の発掘調査を契機として古墳文化の究明にその情熱を注ぎ、昭和43年9月に発刊された『佐賀県史上巻』の中の「佐賀県における古墳文化」の論攻は、研究成果の集約の一つとして位置づけられる。

昭和45年7月に佐賀県立博物館が発足すると初代の芸芸課長に就任し、昭和47年8月には博物館副館長から教育庁に設けられた文化財調査監に任命された。大形化してゆく遺跡の発掘調査や保護行政の高度な助言者として、また、若手研究者の指導と養成にも尽力をした。とくに、県内市町村への文化財保護の指導・助言には考古学あるいは民俗学的立場からことのほか熱心で、多くの役職を兼任した。その主なものは、日本考古学協会員・佐賀民俗学会副会長をはじめ、佐賀県史執筆委員や島栖市史・鹿島市史・佐賀市史の各執筆委員、佐賀県文化財保護審議会委員や佐賀市・鹿島市・武雄市・伊万里市の各文化財保護審議会委員等がある。

② 木下之治の考古学的研究成果は、主に県内出版の雑誌や佐賀県文化財調査報告書あるいは市史・町史等によって発表されている。しかし、昭和30年代後半から昭和40年代にかけて発行された文化財調査報告書の多くの

執筆は木下によるものであるが、木下の考えによって記名がない。

木下の記録に残された最初の考古学の学問的報告は、「三養基郡南茂安村本分貝塚一発掘の話」(新郷土昭和28年7月)である。この本分貝塚は千代田町の託田西分貝塚と共に、佐賀平野に点在する弥生時代の貝塚の一つで、昭和28年3月に発掘調査が実施されている。木下が昭和27年10月に社会教育課に勤務して、まず最初に経験をした発掘調査であると同時に、最初の報告もあった。この報告をみると、「時々小雨が降ってきて指先はかじかむが、眼は小さく躍動する指先の一点を凝視し続ける。」という文章表現や、「始源文化の跡を探求する嚴肅にして然も地味な発掘調査」というものの片鱗に触れて、素直に感銘し、共感する態度に調査団員一同無限の感激を覚える。」といった記載から、原始・古代の探求に対する素直な感情表現を見ることができるが、このような感傷的な文章表現は後年にはまったく見ることができない。より実践的、より学究的態度が全面に表れ、学問に対する厳しい態度を取るようになる。

さらに、この報告の中で「今日遺物遺跡は日々湮滅し去り、湮滅し去ったものは再び復原することは出来ない。この湮滅せんとする古人の遺産を学術的に調査し、記録にとどめて後世に伝えることは緊急を要する吾人の任務である。」と記している。また、「藤津郡久間村鬼塚古墳調査覚え書」(新郷土昭和29年9月)の最後に、「豪族の墳墓であってもこれを築いたのは一般民衆であり、当時の人々の尊い文化的遺産であることはいうまでもない。……先祖の築いた文化遺産を継承して、よりよき文化を積み上げていくことにあり、私達の今日の文化が後世に継承されることを願うと等しく、先祖の残された遺産を大切に保存することは私達の重要な責務であり……」とある。このように、報告の中に表現される文化財の保護思想は、公務を退く昭和51年までの長い間、文化財調査に取り組む姿勢として生き続ける。

木下は、この本分貝塚や鬼塚古墳の発掘調査を契機に、武雄市潮見古墳(「潮見古墳発見の金冠」九州考古学3・4号・昭和33年4月)・大和町小隈古墳(「小隈古墳調査報告」考古学雑誌・昭和34年2月)・白石町妻山石棺墓(「妻山石棺遺跡」新郷土・昭和37年2月)・三日月町丸山古墳(「丸山古墳」新郷土・昭和38年4月)・鳥栖市東十郎古墳群(「東十郎古墳群」佐賀県文化財調査報告書昭和41年3月)・塙田町宝塚古墳(「宝塚古墳」新郷土・昭和41年6月)・北方町勇猛山古墳群(「勇猛山古墳群」佐賀県文化財調査報告書昭和42年3月)・有明町竜崎古墳群(「竜崎古墳群」佐賀県文化財調査報告書第17集昭和43年2月)等の発掘調査を実施しており、昭和40年になると柑橘園造成のため古墳群の調査が多くなる。

一方では、これら古墳群の発掘調査と同時に、武雄市おつば山神籠石(「おつば山神籠石」佐賀県文化財調査報

告書第14集 昭和40年3月)と佐賀市帶隈山神籠石(「帶隈山神籠石とその周辺」佐賀県文化財調査報告書第16集 昭和42年3月)の本格的な発掘調査にも取り組み、昭和38年に実施したおほか山神籠石の発掘調査では水門・列石・土壘・木柵等を確認し、外敵からの侵入を防ぐ意図により構成された遺構、つまり「古代の山城」であるとされた。さらに、帶隈山神籠石の発掘調査では、列石線内の遺構確認のための発掘調査が実施され、併せて周辺に位置する熊本山舟形石棺墓や、天童山頂上箱式石棺墓・花納丸古墳・小清兵衛山古墳・神籠池須恵器窯址・不動浦須恵器窯址等についても、報告がなされている。さらに、西有田町に点在する縄文時代遺跡の発掘調査をも勢力的に実施する。(「西有田の縄文遺跡を訪ねて」新郷土 昭和42年11月)また、大陸文化移入の門戸であった唐津周辺の考古学的調査にも積極的に取り組み(「唐津周辺の考古学的調査」新郷土 昭和32年4月)、県内に点在する経塚遺跡の調査(「佐賀県下の経筒補遺」九州考古学 昭和33年11月)をも手がけている。

③ 木下の前半期における学問的研究成果の集約を、昭和43年9月に発刊された佐賀県史上巻の「古代国家の形成」に見ることができる。とくに、佐賀県の古墳文化を過去の多くの調査から、理論的に組み立てて論考した最初の論文でもある。

その概要は、(一)大和朝廷の成立 (二)大和政権の伸張 (三)大陸との交渉 (四)古墳文化 (五)律令国家体制への展開という形で構成されている。(二)の大和政権の伸張と(四)の古墳文化の項では、大和政権の伸張状況と肥前の歴史的環境を記し、肥前への古墳文化の伝播状況とその発展過程を克明に記録することにより、肥前の古墳文化の特色を見出している。

肥前における古墳文化の伝播と変遷では、肥前における古墳文化の発生を畿内の古墳文化の直接の伝播による影響としてとらえ、古墳文化の伝播が確実に認められるのは5世紀初頭であるとした。その代表的な古墳として、浜玉町の谷口古墳や県内に点在する前方後円墳を比定している。その理由に、谷口古墳の合掌式の竪穴式石室と、出土した長持形石棺や舟形石棺の特色をとらえ、副葬品から「三神三獸冠帶鏡など七面の鏡や碧玉製鏡……きわめて畿内文化的な遺物であって、県内における発生期の古墳文化がいちじるしく政治的である側面を反映しているものであろう。特に、谷口古墳にみられる長持形石棺については、畿内地方においては天皇陵もしくは最有力の首長たちの大古墳の構造として存在しているといわれており、この古墳の被葬者の大和政権との強い政治的な関係が考えられる。」という状況を、発生期の最大の特色としている。一方、佐賀平野部の古墳文化の発生は、銚子塚の前方後円墳や熊本山舟形石棺墓と、銚子塚の壺形土師器や熊本山舟形石棺墓の四獸鏡・碧玉製鏡鍾車・

鉄刀・短甲・鉈等の出土品の組み合わせ状況から、畿内文化の影響としてとらえている。また、石棺の材質・構造と形式あるいは出土品から、5世紀前半には有明海沿岸一帯に文化圏・政治圏のような、稻作という生産手段によって起きたある種の勢力圏の形成がおこなわれつつあったことをも推定している。

5世紀後半になると、古墳文化は県内一円に分布し、6世紀には古墳の内部構造の特色として横穴式石室が県内各地に普及し、その後半には巨大な石材を使用した石室が造営され、畿内の特色が薄れて群集墳が出現をして地方色が強くあらわれるようになる。また、6世紀の古墳文化の特色に装飾系古墳の存在を指摘し、県内に分布する装飾系古墳の西隈古墳(佐賀市)・田代太田古墳(鳥栖市)・伊勢塚前方後円墳(神崎町)について解説をし、7世紀の古墳には、鳥栖市永田古墳群・多久市古賀山古墳・北方町勇猛山古墳等が調査の成果をとらえて列記している。木下は、佐賀県における古墳文化の終末を、一応7世紀後半に位置づけようとしているが、東十郎古墳群で確認されている小石室墳の状況や蔵骨器として用いられている須恵器の双耳壺の出土状況等から、一部地域では8世紀にずれ込むと考えている。

このように、昭和40年代前半までの多くの古墳の考古学的発掘調査の成果から、古墳時代の生活と生産について、古墳の分布の特色と集落の分布あるいは構成から、古墳時代の生活の復原に迫ろうとしている。しかし、これまでの発掘調査が限定された範囲で終っているため、細かな論証は不可能であった。そこで、木下は古墳からの出土品について細かく説明を加えており、ここから当時の生活の復原を試みたと見てよかろう。(次号へ)

(資料係長 森 醒一朗)

※ 木下之治氏の業績を集めたものに(『佐賀県の歴史と文化論』木下之治先生還暦記念論集刊行会 昭和52年5月)がある。



博物館教室で木下之治氏の講義

行事のお知らせ（昭和59年度）

常 設 展

展覧会名	会期	内 容	会 場
佐賀県の歴史と文化展	4月1日 ～3月31日	佐賀県の地質や自然、先史時代から近代にいたる歴史と文化について、自然史・考古・歴史・美術工芸・民俗の各部門について、系統的に資料を展望	博物館
近代の美術・工芸	4月1日 ～3月31日	郷土出身作家の彫塑・陶磁・染織・金工などの代表的工芸をはじめ百武兼行・久米桂一郎・岡田三郎助から現代に至る美術作品、副島蒼海、中林梧竹などの近代の書を紹介。	美術館

企 画 展

展覧会名	会期	会場	展覧会名	会期	会場
勤労者美術展	8月1日 ～8月5日	美術館	佐賀県高等学校芸術祭 美術・書道展	11月11日 ～11月18日	博物館 美術館
E V E N T'84 絵画展	8月21日 ～8月26日	美術館	佐賀県美術展	11月28日 ～12月9日	博物館 美術館
七夕書道展	8月29日 ～9月2日	美術館	エマ会展	12月12日 ～12月16日	美術館
東光展	9月12日 ～9月16日	美術館	さが行動展	1月15日 ～1月20日	美術館
理科作品展	9月19日 ～9月26日	博物館	肥前の中世美術展	2月2日 ～3月10日	博物館
九州新工芸展	9月21日 ～9月30日	美術館	書初書道展	2月13日 ～2月17日	美術館
佐賀新聞学生書道展	9月23日 ～9月30日	美術館	佐賀大学卒業制作展	2月20日 ～2月24日	美術館
よみがえれ佐賀展	9月29日 ～10月10日	博物館	九州グラフィックデザイン展	2月27日 ～3月3日	美術館
日本のみ	10月6日 ～11月4日	美術館	第15回きしま展	3月6日 ～3月10日	美術館
中里無庵・太郎右衛門父子展	10月20日 ～11月4日	博物館	久富邦夫回顧展	3月19日 ～3月24日	美術館

\*都合により上記計画を一部変更することがあります。

人 事 異 動

○転 入（昭和59年4月1日付）

館長 大塚正道（教育次長より）

副館長 西村正剛（図書館総務課長より）

庶務管理係長 秀島智津（店津農林事務所庶務係長より）

○転 出（昭和59年4月1日付）

副館長 首藤留秋（総務部統計課長へ）

主 事 野田布見（佐賀保健所予防係へ）

○退 職（昭和59年3月31日付）

館長 野村綱明

技術員 穂月勝次

博物館・美術館報 第65号
発行年月日 昭和59年8月1日
編集大塚正道
発行 佐賀市城内1丁目15~23
佐賀県立博物館
佐賀県立美術館
印刷 大同印刷